

論文の和文要旨

題目	日本人英語学習者の L2 個人口頭感情ナラティブにおける情動の言語表現
氏名	ミッシェル ウォン
個人的な経験を共有し感情を表現することは、日常的なコミュニケーションにおいて不可欠な要素であり、コミュニケーション能力の重要な側面の一つでもある。Labov and Waletzky (1967) は、個人ナラティブの構成要素として、「指示的機能」(referential function) と「評価的機能」(evaluative function) の二つを提唱した。指示的機能はナラティブの事実在即した内容に関わるものであり、評価的機能は語り手の感情、視点、および出来事の解釈を示すものである。評価はナラティブにおいて中心的な要素であり、ナラティブの重要性を伝える役割を果たす。明確な評価が欠ける場合、ナラティブは無意味なものとして認識される可能性がある。 第二言語 (L2) で一貫性のある魅力的なナラティブを語ることは、言語的、概念的、およびコミュニケーション的スキルの組み合わせを必要とするため、非常に難しい課題である。さらに、文化的な違いを理解する能力も求められる。ナラティブが L2 での慣習化されたスタイルには適合しない場合、ネガティブな評価を受ける可能性があり、誤解を引き起こすこともある。ナラティブは日常的なコミュニケーションにおいて重要であり、感情表現と密接に関連しているにもかかわらず、L2 教育の現場では、ナラティブスキルや情動的な言語表現の取得が十分に重要視されることは少ない。また、児童のナラティブ発達に関する研究は多く行われているが、成人 L2 学習者の感情ナラティブに関する研究は依然として限られており、特に日本人英語学習者を対象とした研究は少ない。 この研究は、日本人英語学習者の L2 ナラティブの特徴を明らかにすることを目的とした。グループの特徴を比較する量的分析と、個々のナラティブを比較する質的分析の両方を取り入れた。まず、28 名の日本人英語学習者と 8 名の英語母語話者の感情ナラティブを比較した。次に、より小規模なサブグループを比較し、熟達度、海外経験、感情テーマという 3 つの要因がナラティブに与える影響を調査	

した。最後に、2名の日本人英語学習者をケーススタディとして分析し、個人差について検討した。

本研究は以下の研究課題に基づいて実施された。

- RQ1: 日本人英語学習者と英語母語話者の口頭感情ナラティブにはどのような違いがあるか？
- RQ2: 英語の熟達度は日本人英語学習者の口頭感情ナラティブにどのような影響を与えるか？
- RQ3: 海外経験は日本人英語学習者の口頭感情ナラティブにどのような影響を与えるか？
- RQ4: 感情テーマは日本人英語学習者の口頭感情ナラティブにどのような影響を与えるか？
- RQ5: 海外経験と英語の熟達度が類似した日本人英語学習者の口頭感情ナラティブにはどのような違いがあるか？

参加者は、「怒り」「恐怖」「悲しみ」「喜び」「驚き」の5つの感情テーマに基づき、個人的な経験を語るよう求められた。

収集されたナラティブは以下の4つの側面から分析された。

1. ナラティブの種類
 - ストーリー (story) : 完結 (complete)、未解決 (unresolved)
 - アカウント (account) : 事実の羅列 (chronological)、反応型 (reaction)、全般的 (general)
2. ナラティブの長さ
 - 節の数 (clause count)
3. 節の内容
 - 行動 (action)
 - 状況説明 (orientation)
 - 評価 (evaluation)

4. 情動的表現

- 感情表現 (emotion expressions)
- 評価語 (evaluative words)
- 強調表現 (intensifiers)
- 直接話法 (reported speech)
- 感嘆詞 (interjections)
- 強調アクセント (stress)
- 繰り返し (repetition)
- 談話標識 (discourse markers)
- 直接の呼びかけ (direct address)

統計分析は RQ1（話者グループ）および RQ2（熟達度）に対して実施されたが、RQ3（海外経験）、RQ4（感情テーマ）および RQ5（ケーススタディー）はサンプルサイズの制約により統計的比較は行われなかった。

日本人英語学習者と英語母語話者の比較（RQ1）の結果、英語母語話者は日本人英語学習者よりも頻繁にストーリー型ナラティブを使用し、より多くの展開や評価的内容を含んでいた。また、情動的表現の使用については、日本人英語学習者は主に感情表現に頼る傾向がある一方で、英語母語話者は直接話法、感嘆詞、強調、談話標識、直接の呼びかけなど、より多様な情動的表現を用いることが明らかになった。この結果は、学習者が直接的な情動的表現を好む傾向があると示した先行研究と一致している。さらに、両グループともにさまざまなナラティブの種類を使用した。最も多かったのは「未解決型ナラティブ」であった。この結果は、感情ナラティブにおいては従来の完結型ナラティブよりも未解決型ナラティブが一般的である可能性を示唆する。

日本人英語学習者グループ内の熟達度についての比較（RQ2）では、熟達度が高まるにつれて、学習者はより詳細で評価を伴うストーリー型ナラティブを使用する傾向があった。高熟達度の日本人英語学習者は、直接話法、感嘆詞、強調、談話標識、直接の呼びかけなど、より多様な情動的表現を使用した。しかしなが

ら、最も熟達した日本人英語学習者であっても、英語母語話者と比較すると感情表現の範囲が限られ、基本的な感情語の繰り返しに依存する傾向が見られた。この結果は、日本人英語学習者がこれらのスキルを向上させるためには、より具体的な教育的支援が必要であることを示唆している。本研究では、L2 教育において個人的ナラティブに感情表現を導入するための二段階の教授法を提案する。

海外経験の影響についての分析 (RQ3) では、まず同じ熟達度の日本人英語学習者の中、海外経験のある学習者と海外経験のない学習者を比較した。その結果、海外経験のある学習者は、より長いナラティブを語る傾向が見られたが、それ以外に大きな差は確認されなかった。また、海外経験のある学習者を除外し、熟達度に関連する分析を改めて行ったところ、RQ2 の結果とほぼ同じパターンが見られた。これらは、熟達度の影響が海外経験によるものではなく、独立した要因である可能性を示唆している。ただし、海外経験の影響については、対象者が少ないため明確な結論を下すのは難しい。

感情テーマのナラティブへの影響 (RQ4) については、感情テーマによって日本人英語学習者と英語母語話者の間にある程度の類似したパターンが見られた。例えば、「恐怖」のナラティブは行動中心で完結型ナラティブをとることが多く、「怒り」のナラティブは長く、評価を多く含み、情動的表現が豊富であった。一方、「喜び」のナラティブは、出来事よりも経験そのものに焦点を当てた記述的なアカウント型ナラティブが多かった。「悲しみ」と「驚き」は特に明確なパターンは見られなかった。これらの結果は、特定の感情ナラティブには話者グループを超えて予測可能なパターンが存在する可能性を示唆している。

最後に、ケーススタディとして選ばれた 2 名の日本人英語学習者 (RQ5) について、量的・質的分析を行ったところ、類似した背景を持ちながらも、異なるナラティブおよび情動的表現の L2 スタイルを示した。また、彼らの日本語と英語のナラティブを比較したところ、全体的な構造や内容は類似していたが、トーンや感情表現には微妙な違いが認められた。これらの結果は、文化的背景、熟達度や海

外経験だけでなく、個人差が L2 ナラティブと情動的表現に影響を与える可能性を示している。

本研究にはいくつかの限界がある。まず、参加者の抽出法およびサンプルサイズの制約が挙げられる。特に RQ3～RQ5 については対象グループの規模が小さいため、結果は一般的であると見なすことは難しい。加えて、ナラティブスタイルや情動的表現に影響を与える要因は多岐にわたり、それらの相互作用をより詳細に検討する必要がある。今後の研究では、より大規模で統制されたデータを用いて、文化的背景、熟達度、海外経験、感情テーマ、個人差がナラティブにどう影響を与えるかを探ることが求められるだろう。

本研究は L2 におけるナラティブの特徴や感情表現の理解に貢献し、これらのスキルがコミュニケーション能力において重要であることを主張する。また、本研究の知見が L2 教育における感情表現の指導やナラティブスキルの向上に寄与することを強く望むものである。